

2019年横浜ナザレン教会 聖霊降臨節第十二主日礼拝
「祈りの中心」ルカ福音書11:1~4

【聖書箇所】

ルカ 11:1 イエスはある所で祈っておられた。祈りが終わると、弟子の一人がイエスに、「主よ、ヨハネが弟子たちに教えたように、わたしたちにも祈りを教えてください」と言った。2 そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。3 わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。4 わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

1 主の祈りの中核をなす祈り

ルカ福音書の主の祈りも、四回目となりました。今日は、三番目の祈り「**私たちに必要な糧を毎日与えて下さい**」という祈りです。ルカによる福音書の主の祈りは、五つの祈りからなりますから、三番目はちょうど真ん中に位置する祈りです。また、最初の「御名が崇められますように。」「御国が来ますように。」という二つ祈りは、「御名」「御国」とあるように神に関する祈り願いです。これに対して後半の二つ「**わたしたちの罪を赦してください**」と「**わたしたちを誘惑に遭わせないでください**」に共通するのは「わたしたち」という言葉。つまり後半二つは、私たちにに関する願いです。だから、三番目の「**私たちに必要な糧を毎日与えてください。**」という祈りは、主の祈りの中の転換点、中心軸とも言われています。それは形式的な事ではありません。内容もまた「主の祈りの中心」だということです。それをご一緒に見ていきたいと思えます。

2 全面無条件降伏

三番目の祈りで、主イエスが私達に父なる神に対して願い求めなさい…と仰った「糧」。原語のギリシャ語では、「一塊のパン」を指す単語が使われています。改革者・マルティンルターは、小教理問答で「このパンとは何を意味しますか」という問いかけに対して次のように答えています。「**からだの栄養と維持のために必要なすべてのもの。すなわち、食べ物、飲み物、衣服、履物、家、屋敷、畑、家畜、お金、財産、よい家族、よい支配者、よい政府、よい気候、平和、健康、規律、名誉、よい友人、忠実な隣人などです。**」私たちが体を維持するのに必要なもの全てを父なる神さまは与えて下さる…それが聖書の信仰です。神は私たちが食糧やお金、衣服や住居などがなければ、生きていけないという事をよくご存じです。「『毎日の食事』のような日常茶飯事なことは、神の御国に比べれば、罪の赦しや永遠の命に比べれば、たいしたことではない、些細でとるに足りない。私の出る幕ではない！」とは決して仰らない

のです。それがどんなに小さい事に見えても、天の御神は私たちが生きるのに必要なもの全てを与えて下さる…三番目の祈りの背後にはそのような信仰があります。三番目の祈りを祈ることは、この事を受け入れ信じるのが前提となっています。つまり、私たち人間は、命を維持するために必要なもの全てを天の御神に頼っているということを認めること。だから、この三番目の祈りを、「神に対する全面無条件降伏」と言った方もいます。私たちの命全体、肉体の事も心の事も魂の事も全て神にかかっている事を受け入れ、父なる神に自分に必要なもの全てを祈り求めなさい…とイエスさまはここで仰っています。

主イエスは、弟子たちが、私たち人間が、「その時だけ」「その場所でだけ」「その事に関してだけ」と限定的に神を受け入れ信じる傾向があるとご存じだから、このような祈りを中心に置かれたのだと思います。実際、私たちは考えます。「私の心のこととか、精神的な事であれば、イエスさまの父なる神さまは絶大な力を奮ってくださる、慰め励まし平安を与えてくださる。だけど、物質的なこと、衣食住やお金なんて事を神さまに頼っても仕方ない。祈っても仕方ない。」また、日曜日だけ教会でだけ信仰者として礼拝し、家に帰れば全く異なる態度で生きる…ということはありません。日々の食事も含めて、神さまの支配のもとにあるのではなくて自分が主人となる、そういう生き方を無意識にしてしまうのが私たちだと思います。しかし、限定的に神を受け入れて生きるのであれば、天の神さまは私たちの「継父」にすぎません。心底心を許すこともない「継父」として、表面だけその時だけその事だけに限定してお行儀よく神を受け入れようとするのでは、天の神を本当に「父よ！」と呼ぶ事にはならないし、神の愛のうちに生きているわけではありません。受け取れる恵みも限定的なものにならざるを得ません。第三の祈りは、「天の父なる神を継父ではなく本当の父として信頼し、全てを委ねて生きなさい」と主イエスが私たちに勧めている悔い改めであると言えます。何より、主イエスご自身が、父なる御神に全て信頼し委ねて生きた方です。全てを委ねて十字架の死までたえたイエス・キリスト。第三番目の祈りには、主イエスの信仰が、人生が貫かれているとも言えます。だからこそ、「主の祈りの中核」と言えるのです。

3 マナ

さて、第三の祈りで願い求めているのは、「必要な糧が毎日与えられること」です。「その日、その時に必要な糧を与え続けて下さい」という祈りから思い出されるのは、出エジプト記16章のマナの出来事です。エジプトの王ファラオの奴隷となってしまったイスラエルの民は、その苦しみを神に訴えました。神はその祈りを聞き給い、モーセを遣わして彼らをエジプトから脱出させました。シナイ山で十戒を通して契約を結びイスラエルを神の民とし、先祖アブラハムに約束した乳と蜜の流れるカナンに導き入れるためでした。神はイスラエルを、神の戒めを生き、その御心を地上に広めていく最初の民として選んだの

です。そのために、神は彼らをエジプトから脱出させたのです。しかし、神によってエジプトから脱出した彼らの目の前に広がっているのはどこまでも広がる荒れ野でした。僅かなオアシス以外には生きるために必要な水も食料もない荒野。そういう所を彼らは延々とシナイ山を目指して、またカナンを目指して旅するのです。苛酷な試練でした。エジプトでの奴隷労働の苦しみから解放された彼らを待ち受けていたのは飢えと渇きの苦しみ。彼らはエジプト時代を懐かしみ始めます。「あのときは肉のたくさん入った鍋の前に座り、パンを腹いっぱい食べられたのに」と。そして、荒れ野でこんな苦しみにあう位なら「エジプトの国で、主の手にかかって死んだ方がましだった」とまで言うようになりまし。彼らの怒りと不平不満の声を聞かれた時、主なる神はモーセにこう言われました。「見よ、わたしはあなたたちのために、天からパンを降らせる。民は出て行って、毎日必要な分だけ集める。わたしは、彼らがわたしの指示どおりにするかどうかを試す。ただし、六日目に家に持ち帰ったものを整えれば、毎日集める分の二倍になっている。」(出エジプト16:4-5)。民が天から降ってきたパンを集めて見ると、「多く集めた者も余ることなく、少なく集めた者も足りないことなく、それぞれが必要な分を集めた」と記されています。とても不思議な食べ物です。イスラエルの人々は、この食べ物を、「これは何か？」を意味する「マナ」と名付けました。しかし、民の中には、自分だけのために二日分集める者がいましたし、七日目の安息日にもパンを集めようとする者たちがいました。神は明日も必ず必要な食物を与えてくださると信じる事が出来ず余分に集めようとしたのです。食物を食べることにおいてさえ、いえ、日々の食物を食べることにおいてこそ、主なる神を信じる信仰が問われていることがよく分るエピソードです。

4 足ることを知る信仰

しかし、信仰が問われているのは、荒れ野のイスラエルのように上渴している状況だけではありません。食料がいくらでも手に入る状況においても私達人間は、父なる神を神とできなくない存在であることが明らかになります。私たちは欲しいものが手に入る状況では神を忘れてしまうからです。そして自分達が神となる存在です。しかし、それでは健やかに生きることができない。何故なら、私たちは神ではないから。私たちは自分達の必要が分からず、必要以上のものを欲しがらるからです。私たちは、食べ物がなければ「飢える存在」であると同時に、「必要以上に欲しがらる存在」でもあります。そして、その生きる上では不必要な欲望が私達を食い尽くします。欲望が満たされる際の満足感は一時的なものだから。欲望を満たす事を第一に突き詰めていけば、「もっともっと満足したい」と前よりも多くのものを求める事となり、常に飢え渇くこととなります。欲望にきりはなく、求めれば求めるほどに飢え渇き、いつも不足感、欠乏感に苛まれる…現代の一見豊かな社会が、私たちが欲望を満たす事を

基本として成り立っている消費社会であることも私達の貪欲を助長しています。私たちの社会で問題になっている様々な依存症、アルコール依存、薬物依存、ギャンブル依存、摂食障害、買い物依存、家族依存、恋愛依存、仕事依存は、私たち人間の限界を示しているようです。肉体的な欲望だけでなく精神的な欲望も含めて、自分の欲望を叶えることを第一とした結果、その欲望にのみこまれてしまい、バランスを失って健やかに生きることができない、父なる神を見失った私達人間が陥りやすい姿ではないかと思えます。

そういう現代世界にあって「主の祈り」を真実に祈りつつ生きることは救いです。「私は自分に必要なものが分かりません、しかし、私の父よ！あなたはご存じです。どうかそれを私に与えてください。そして、あなたの与えて下さるもので私達が満足しますように」と真剣に祈り、そこに生きることは幸いです。自分の欲望を満たすことを第一とする生き方、自分の欲望を神とする生き方から、私達を解き放ち自由な生き方へと導いてくれる祈りだと思えます。

5 私たちの糧

さて、旧約聖書の箴言には、そんな人間の愚かさ弱さをよく知った知恵に溢れた次のような祈りがあります。「二つのことをあなたに願います。わたしが死ぬまで、それを拒まないでください。むなしいもの、偽りの言葉を／わたしから遠ざけてください。貧しくもせず、金持ちにもせず／わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください。飽き足りれば、裏切り／主など何者か、と言うおそれがあります。貧しければ、盗みを働き／わたしの神の御名を汚しかねません。」(箴言30:7～9)。この中に「わたしのために定められたパンで／わたしを養ってください。」とありますが、この「定められたパン」を直訳しますと、「引き裂かれたパン」です。一塊のパンまるまるではなく、手でちぎられたパン切れを求めています。つまり、そこには一塊のパンを割いて分け合う人たちがいるのです。ですから、パンを分け合う仲間も含めて、神に願い求めている祈りです。主の祈りの三番目の祈りが求めているのも、「私に必要な糧」ではなく、「私たちに必要な糧」。「私だけに必要な糧」ではなく、「私たちに必要な糧」、仲間の必要も含めて祈り求めています。大切なことは自分だけにお腹が一杯になるパンが与えられるかどうかではない、一塊のパンをまるまる一人で食べてもそれは空しく、寂しく、悲しく、私達をまことに養うものにはならない…と聖書は語っているのだと思えます。

出エジプトのマナの出来事でもわかりますが、私たちは、明日の分も明後日の分も蓄えておかなければ不安を感じる者達です。明日も明後日も「わたしだけ」は飢えたくないと思うから「わたしだけ」の分を余分に自分の手で確保しようとしています。そうする時、私達には、天の父はいません。そんな神を忘れた私達人間が、弱肉強食、孤独で分断された社会をつくりあげるのです。日本は、21世紀を迎えてあつという間に格差社会となりました。2010年から

2014年の調査では、人口の約5.1%、20人の一人の割合、日本全体で612万人、横浜市の人口の1.6倍以上の人々が一年間で「日常的」か「時々」、飢えを体験しているそうです。大量の期限切れの食物が廃棄される一方で、弱い人々、小さな人々、貧しい人々は飢えています。今日まで夏休み、明日から授業が始まる小学校も多いようですが、学校給食が食べられない夏休み、極端に体重が落ちる子ども達が必ずクラスに一人はいる…という話を聞いたことがあります。私たちが父なる神と関係なく生きる時、「私たちに必要な糧を毎日与えて下さい」という祈りを忘れる時、自分達だけの満足を追い求める時、小さき者、弱い者を飢えさせる社会に加担する事になるのではないのでしょうか。

この事を教会はその歩みの最初からよく知っていました。今から1700年前の四世紀、カッパドキアにバシレイオスと呼ばれる優れた教会の指導者がいましたが、彼は次のような説教を残しているそうです。「あなたの家で食べられることのないパン、それは飢えている人のたちのものです。あなたのベッドの下で白カビが生えている靴、それは履物を持たない人たちのものです。物入れの中にしまいこまれた衣服、それは裸でいる人たちのものです。金庫の中で錆びついている金銭、それは貧しい人たちのものです。」現代でもそのまま通用する説教です。

日ごとのパンは「わたし」に与えられたものだけけれど、「わたしにだけ」与えられたものではありません。それは仲間と分けて食べるためにパン切れにして食べるものなのです。私たち一人ひとりが求めるべきパンは、「定められたパン」。「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください」と祈ることを教えて下さったイエス様は、「あなたがたは独りではなく、他の人々と共に生きなさい。神様が与えてくださるパンを人々と分け合って食べなさい。そこにあなたがたの命があるのだ」とおっしゃっているのだと思います。

6 友となる敵

そのパンを分けあう人々とは、私たちが「敵だ」と思っている人々のことを含みます。神は、私たちがご自身の敵である時でさえ、私たちが愛し私たちの上に太陽を昇らせ雨を降らせ食物を与えてくださるからです。そして、ご自身の独り子をあの十字架に磔にして裁き、私たちの罪を赦してくださったのです。「この神の圧倒的な愛、信じ難き愛を受け入れるのであれば、私たちの前には『憎むべき敵』はいない。『愛すべき敵』しかいないのです。」とそういった人がいます。本当にそうだと思います。そして、私たちの愛がイエス・キリストの愛であるならば、いつかその『愛すべき敵』は共に食卓を囲む友となります。必要な時間をかけて変えられていきます。そして、そこにこそ神の御業が現れるのです。そこにこそ私たちの希望があります。私たちが欺く事のない希望があります。だからこそ、この祈りは、主イエスの祈りの中核にあるのです。

7 主の食卓

「私たちに必要な糧を毎日与えて下さい」と祈る私たちの日々の食事は、父なる神が与えて下さるもの。しかし、他人行儀な妙に厳粛な態度をとる必要はありません。愛する神が与えて下さるものだからです。主イエスは食事など神から頂いたものをととても楽しまれた方の方のようです。あまりに楽しまれたからでしょう、同時代の人々に勘違いされ、「あいつは大食漢で大酒飲みだ」と言われるほどでした。主イエスは神からの日々の贈り物を喜ぶことこそ、私たちの命を健やかに生かすことだにご存じだったのでしょ。

以前、インターネットで若い父親のあるツイートが話題になっているという記事を読みました。それは次のような内容でした。「ある日、息子が不思議そうに聞いてきた。『パパはどうして僕が食べているのを見ると嬉しそう顔をするの？自分が食べているわけではないのに』と。どうやら息子の食べるのを見て喜んでるのが顔に出ていたようだ。それで、自分が子供のころ、両親が自分が食事をする姿をみて嬉しそう表情をしていたことを思い出した。大人になり子どもができて初めて、自分が満足する以上に嬉しいことがあるのだと分かった。」愛しく小さい者が嬉しそうにしている姿を見る喜びは、私達の多くが知っているでしょう。

それは、父なる神も同じだと思うのです。いえ、物事は逆で、私たちの喜びは、父なる神の喜びのおすそ分けのように思います。父なる神は、幼子である私たちが仲間と共に、父なる神からのもので必要をみだし満足して喜ぶこと、与えられたものを楽しんで生きることを、このうえなく嬉しく思っておられる、ご自身のこと以上に嬉しく思い、喜んでおられる、その神の愛が、神の思いが私たち人間にもわかるように、私達もまた愛する者が満足する姿に喜びを感じるようになっているのではないのでしょうか。

「私たちに必要な糧を毎日与えて下さい」と祈りそこに生きることは、毎日与えられた食事を、日々の生活に必要な物質を、人間関係を、父なる神がくださったものと信じ、感謝し、喜んで生きることです。そうして父なる神がそれを眺めて喜んでおられることを知る、父なる神の愛を知る事です。父なる神の愛こそ、私たちの命を豊かに養ってくださいます。御子を十字架に差し出すほどに私達を愛して下さる神を父と呼び、そのお方が私達の為に食卓をはじめ必要なものを整えてくださった…という事を思います。その時、自分だけの欲望を満足させる私達の貧しく孤独な食卓は、主イエスの食卓と変わります。たとえ一人でも一人ではありません。今、目の前の食事の背後には、神の御手と、その御手の内にある数多くの人々の愛の働きがある事に気づかされるからです。食卓が、私たちの生活の場所が、神との交わり、人々の交わりの場となります。それは、神の国の先駆けです。私達が、それぞれの場所をつく食卓は様々でしょう。しかし、その全てが神の国でとる食事の先駆けにな

るのです。私たちの前にある糧、それがコンビニのお弁当であっても、カップラーメンであろうとも、主イエスによって裂かれ与えられたパンなのです。主イエスが食卓の主人として、私達一人一人に裂いて分け与えて下さったパンなのです。神の愛が詰まったパンです。まことの父が私達に分け与えて下さる糧に共に養われて、喜んでこの世の旅路を歩み続けたいと切に願います。